

電機ジャーナル

DENKI JOURNAL

NEW MEMBER

エンドレスハウザー山梨労働組合

広報委員スコープ season2 輝く電機の仲間たち ⑤

安川電機労働組合
ロボットと働く未来を創る技術者

キーワードから読む組合「ほくら」のこれから ②

「テレワーク」
なぜ広がらないのか?

INSIDE ▶ OUTSIDE

政治:伊藤 惇夫
なぜ、新党は「惑星」のまま
消えるのか

経済:高成田 享
アベノミクス景気はいつまで
分断社会に対応する政策とは

あなたと動けば、未来は変わる

参議院議員 矢田 わか子
「働き方改革」と現場力の強化

大使館便り From INDIA

在インド日本国大使館 一等書記官 浦 誠治

地協探訪

東四国地方協議会

INFORMATION

「半導体・ディスプレイ部会」誕生

「連合第15回定期大会」開催

電機連合イベント予告

中堅・中小労組総合労働条件改善闘争セミナー
「賃金実態調査・分析支援ツール」デモンストレーション
WEB会議システム「V-CUBE」デモンストレーション

電機連合 中央執行委員長

野中孝泰

新春対談

バルセロナオリンピック
平泳ぎ200メートル金メダリスト

岩崎恭子



オリンピックで金メダルを手にした14歳も、
水泳と真剣に向き合った18歳も、
子育てに奮闘する今も、
わたしにとって“一番の幸せ”

新春対談

野中孝泰 × 岩崎恭子

オリンピックで金メダルを手にした14歳も、
水泳と真剣に向き合った18歳も、
子育てに奮闘する今も、
わたしにとって“一番の幸せ”

バルセロナオリンピックで金メダルを獲得した14歳のシンデレラガールは、
ゴーグル跡の残る日焼けした顔で「今まで生きてきたなかで一番幸せ」と屈託なく笑った。
運だけでは勝ち残れない厳しい世界で、なぜ彼女は成長できたのか、その原動力は何か。
競争力を育む根源や働くことの喜びを追求する野中委員長と、その本質を語り合いました。

世界を虜にした 14歳の金メダリスト

野中 明けましておめでとうございます。

岩崎 おめでとうございます。

野中 わたしたち電機連合には、およそ640の組合が加入していて、56万人以上の組合員がいます。ところで、今、岩崎さんがよくお使いになる電機製品を3つ挙げるとしたら何でしょうか？

岩崎 最近は暖房機器と加湿器ですね。機能でいえば、テレビのチャンネル全部録画もよく使っています。

野中 なるほど。1950年代に「三種の神器」と呼ばれたのが白黒テレビ、冷蔵庫、洗濯機でした。戦争が終わって10年ほどが経って、「もはや戦後ではない」という言葉が流行語にもなった時代です。1964年の東京オリンピックの時に「新・三種の神器」と言われた製品がありましたか、こちらはご存じですか？

岩崎 カラーテレビと……あとは何だろう。

野中 3つともCCから始まる製品。カラーテレビ、そしてクーラーとカー（車）です。

東京オリンピックがカラーテレビの普及を後押ししましたが、わたしたち電機産業としては、ほかにも2つの事業でオリンピックに大きく貢献しました。ひとつは、世界中の人たちがリアルタイムで競技を観戦するための衛星放送。もうひとつが、電子計測器の導入です。水泳競技でもよくタッチの差で勝負が決まる場合がありますよね。電子式自動審判装置、いわゆる「タッチ板」がお目見えしたのも東京オリンピックでした。タイムも正確に測れるようになり、そのことから「科学のオリンピック」とも呼ばれたんです。

K Y O K O I W A S A K I

バルセロナオリンピック
平泳ぎ200メートル金メダリスト

対談 岩崎 恭子

岩崎 恭子 いわさき きょうこ

バルセロナオリンピック平泳ぎ200メートル金メダリスト。
スイミングアドバイザー。

1978年生まれ、静岡県沼津市出身。5歳で水泳を始めるとすぐに頭角を現し、12歳で日本選手権出場を果たす。14歳で初出場したバルセロナオリンピックでは、当時のオリンピック記録を塗り替えるタイムで競泳史上最年少金メダリストに輝く。引退後は児童の指導法を学ぶために米国へ留学し、水泳・着衣泳のレッスンやイベント出演を通して水泳の楽しさを伝える活動をしている。



そして時代は移って、1992年のバルセロナオリンピック。当時14歳でしたね。こんな小さな女の子がまさか金メダルをとるだなんてと、とても驚きましたよ。

岩崎 自分が一番びっくりしました(笑)。

野中 予選から自己ベストを更新して、決勝タイムはさらに1秒縮めていましたよね。オリンピック前の自己ベストから考えると5秒くらいタイムが縮まったという普通では考えられない短期間での急成長だったと思います。

岩崎 不思議ですね。決勝のあの泳ぎが、生涯ベストの泳ぎだったと思います。もう一度あんなふうに泳ぎたいと思っていました。結局叶いませんでした。

野中 オリンピックに行くまでは「中学生の女の子が出る」くらいの印象でしたが、予選からどんどんタイムを縮めて、少女が決勝の舞台に立つ頃には、会場も相当盛り上がりつつあったんですよ。

岩崎 スペインでも水泳は人気競技です。会場は満員でした。あんなに大勢の観客の中で泳ぐのは初めてでしたが、「これがオリンピックなんだなあ」くらいの気持ちでした。

野中 決勝だけでなく、あのオリンピックの期間に爆発的な力が生み出された背景、要因はどこにあったと思いますか？

岩崎 選考会からオリンピックまでナショナルチームに入ったことで、当然練習量は増えて、脚力が伸びたという点があります。ちょうど選手としての成長期に差しかかっていたので、記録がぐんぐん伸びていた時期でした。もちろん、運もあったと思います。2位の選手とは0・2秒差でしたから。あとは何よりも、練習の質が、あの時のわたしにマッチしていたんだと思います。



電機連合 中央執行委員長

野中孝泰

新春

野中 孝泰 のなか たかひろ

1962年生まれ、福岡県出身。松下電器労働組合連合会(現パナソニックグループ労働組合連合会)副中央執行委員長、電機連合副中央執行委員長・書記長を歴任、2016年より現職。

目の前の課題を クリアし続けた先に

野中 そもそも、いつから水泳を始め
たんですか？

岩崎 5歳からです。

野中 すごいですね。始めてから10年
もしないうちに金メダルに手が届いた
んですね。やっぱり、当時からバリバ
リ泳いでいたんですか？

岩崎 いいえ(笑)。大手のスイミン
グスクールではなく、町にひとつしか
ないスイミングクラブから水泳を始め
たんです。そこで自由に、ゆっくり、
のびのびと泳いでいました。

野中 意外とマイペースに泳いでいた
んですね。

岩崎 はい。それがわたしには合っ
ていたんだと思います。練習メニューを
ぎゅうぎゅうに詰められて、毎日練習
漬けだったらたぶん競技を続けられな
かったと思います。それから、オリ
ンピックの選考会では姉とレースで競い
合いましたが、そういう目標とする存
在が身近にいたこともプラスに働いま
した。子どもって目の前のことに一生
懸命になるじゃないですか。全国大会
に出るとか、そこで優勝するとか、今
思えばそれだけでもすごいことですが、
当時のわたしにとってはオリンピック



に行くことも目の前にあることを一生
懸命にやった結果で、そんなにすごい
という感覚はなかったんです。

野中 卓球の福原愛さんなどは小さい
時から泣きながら必死に練習している
姿が印象的ですが、まったくそういう
ことはなかったんですね。

岩崎 小学校まではそうですね。中学
生になると県の合宿や、ジュニア代表
を超えて一気にトップの合宿に入った
ので、陸上トレーニングが加わったり
と練習の量も質も激変しました。ただ、

そういう変化に対応できたのは自分の
強みだったと思います。

野中 トップレベルの選手が集まるな
かに身を置いて、ライバル意識とか対
抗心が芽生えることはありませんでし
たか？

岩崎 水泳の場合はタイムとの闘いな
ので、わたしはあまり選手を意識する
ことはありませんでした。自分との闘
いですね。特定の相手を意識するより、
その大会で自分がどう泳ぎ切るかとい
うことを考えていました。

野中 まず自己目標をきちんと決めて、
そこにどうアプローチするかが毎回の
ルーチンだったんですね。それを超え
られたらうれししいし、ダメだったら自
分に対して悔しく思うと。

岩崎 そうですね。本当にそこなんです。
自分の行動が自分に返ってくることは、
小さい時から何となくわかっていまし
た。たとえば、体調を崩して練習を休
めば、次の試合にいいタイムが出ない
など、自己コントロールの大切さは早
いうちから認識していました。

決勝前に スイッチを入れてくれた コーチのひと言

野中 岩崎さんはどうやらのんびり屋さんなのですが、決勝を迎えた時の心理状態はどうだったんですか？ タイムも出ていたし、やりきった感はありませんでしたか？

岩崎 正直なところ、メダルに対して執着心はありませんでした。目標にしていたのは日本記録の更新。およそ10年間破られていなかったその日本記録も更新し、決勝を前にしてすでに満足感がありました。

ただ、「もうこれでいいかな」と自分の中で線引きをしそうになった時に、鈴木陽二ヘッドコーチに「もう一本あるからね」と言われて心が踏みとどまりました。

野中 たったそれだけの言葉で？

岩崎 そうですね。心を見透かされているな、さすがだな、と強く感じました。「メダル狙えるぞ」と言わないところも、ちょっとお調子者だった14歳のわたしのことをよくわかっていて、選んだ言葉ではないでしょうか。決勝を前にフワフワしていた気持ちが一気に引き締まりました。きつと、あの時のあの言葉がなかったらメダルはとれていなかったと思います。

野中 何でもなような言葉でも、岩崎さんの気持ちにもう一度火を付けたんですね。

岩崎 鈴木ヘッドコーチは、鈴木大地さんの1988年ソウルオリンピックでの金メダル獲得を支えたコーチなんです。減多なことでは怒りませんが、怒るとすごく怖いコーチです（笑）。ただ、選手のことをよく観察していますし、選手も見られていることを意識していました。鈴木大地さんだけでなく、何人もオリンピック選手を育て上

げたコーチなので、みんな「勝負師」と呼んでいましたね。

選手を育てた平井伯昌コーチもすごい。このふたりのコーチは特別です。

野中 わたしは電機メーカーに勤めているので、いろいろな電機商品を開発したり、つくったりするのですが、その競争力の源は、最後は人だと思うんです。その人が持っているいろんな力をどう引き出すかが大切になります。その引き出し方は2つあって、「人を

活かす」とことと「人が活かす」という発想。両方とも重要で、それを実行して初めて人の無限の可能性が引き出されると思っています。

この「を」と「が」には違いがあつて、「人を」というのは、その人の力が発揮できるような環境をつくってあげることをいいます。

一方、「人が」という発想は、自らがそういう意識を持って動くことを表しています。両方がマッチした時にその人本来の力が発揮されると思うんです。今のお話

を聞くと、まさに岩崎さんをその気にさせる魔術がそこにあるわけでしょう。鈴木ヘッドコーチはよく人を見ているんですね。

岩崎 たしかに、そのとおりだと思います。ちゃんとその人のことが見えていないと、性格もわかりませんから。それから、鈴木ヘッドコーチのことはもちろん金メダリストを育てたコーチなので信頼はしていますし、純粹に人として尊敬できる方なので、決勝前の言葉もすとんと胸に落ちました。

野中 その信頼関係はどういうところから生まれたんでしょうか？

岩崎 バルセロナオリンピックの競泳代表に選ばれた時、わたしは最年少だったのですが、すごく気にかけてくれたんです。メダルを本気で狙う選手が集う中で、わたしにもちゃんと声をかけてくださったんです。それだけでうれしじやないですか。

野中 ちゃんと見てくれてる。気にかけてもらっていることが伝わってきた。単純だけど、大切なことですね。



1992年バルセロナオリンピック女子200メートル平泳ぎ決勝、会心の泳ぎで金メダルを手にする

タイムよりも人として 大きく伸びたアトランタ

野中 1996年のアトランタオリンピックにも出場されましたが、この時は残念ながらメダルに手が届きませんでした。

岩崎 そうですね。ただ、バルセロナオリンピックが終わって、やる気がなくなっていた時期から、もう一度自分ががんばってみようと思って水泳と向き合えたことは、今でもすごく心の支えになっています。今ではそれも経験と言えますけど、14歳の時に心ないことを言われたり、傷ついたりした時期に、自分でもう一回がんばってみようと思えたのが18歳のアトランタオリンピックだったので、出場できたことはすごく意義があったと思います。

野中 国民の期待やそれによるプレッシャーもあったと思います。しかし、メダルやタイムよりも、もっと大きな収穫があった大会だったんですね。

岩崎 競技では負けましたが、人間としての成長は実感できました。

野中 スポーツには、勝ち負けが歴然と存在します。しかし、スポーツが多くの人の心を惹きつける要因には、そこに「成長」というストーリーがあるからだと感じます。水泳の場合はどうですか？

岩崎 水泳は個人種目なので、競技するうえで自分自身との闘いになります。自分を強く持てる人が速くなりやす。

でも不思議なことに、「チームワーク」はあるんです。合宿やトレーニングはひとりではしませんが。コーチがいて、選手がいて、一緒に行動するうちに一体感が生まれるのも確かです。相手を想う心や、先輩・後輩のつながりも芽生えて、コーチとの絆も育まれます。それは、水泳連盟と現場がすごくスムーズに意思疎通ができていく結果であって、だからこそ強い日本競泳界になっていったのだと思います。

野中 それは意外ですね。おそらく、個人競技として自らを追い込むことの厳しさを知っているから、メンバー同士が助け合えるんでしょうね。

競泳大国に見た 個の伸ばし方

野中 アトランタオリンピック後は20歳で競技から離れて、次のステップとして、指導者の道を選びましたよね。

岩崎 競技の世界から身を引いても、水泳とは今後もかかわっていきたいという思いは漠然とありましたが、指導するうえで、自分には足りない何かがある、という思いも持っていました。

もともと経験を積まないといけないと感じていた時に、日本オリンピック委員会から指導者育成を目的とした海外派遣の機会をいただきました。派遣先の国は自分で選べるというので、いったら競泳の強豪国であるアメリカに行くことと決めました。トップ選手はどんな環境から生まれるんだろうということに興味があったんです。向かった先は、何人もオリンピック選手を輩出しているスイミングスクールで、そこで1年間、5歳から10歳くらいの子どもたちの指導にあたりました。彼らからしたら「英語も話せないコーチが来たぞ」という印象だったと思います(笑)。

この留学で、自らアクションを起こすことが大切だとわかりました。そして自分の意見をしっかりと発言すること、も大事だと感じました。

野中 岩崎さんがアメリカでコーチをする2年前の2000年、わたしはアメリカに向かわれている組合員のご家

族を訪問してきました。ご家族に何か困ったことはないか尋ねると、小学6年生の子どもの宿題が難しいと言っています。なんでも、ちょうどブッシュとゴアが大統領選挙戦を繰り広げている時期で「ブッシュとゴアの主張とは」「それに対するあなたの意見は」といった内容の宿題が普通に出されると聞きました。びっくりしましたが、小さい頃から自分の課題意識、自分の意見を持つように教育されているんですね。

岩崎 そういうことですね。同じように、アメリカのコーチたちは、子どもたちに自分で考える環境を与えていました。たとえば、試合が近い週末、日本だったら前日までに集合時刻や持ち物が明記されたプリントなどが配られますが、それでは自分で考えることにはならない。これがアメリカの場合は、「週末に試合があります。何時に集合ですか、試合の時は朝食を食べたらいいますか」と、ちゃんと子どもたちに質問をするんです。これを食べなさいじゃなくて。そういうところから違うんだなと感じました。

野中 まずは自分で疑問を持つということですね。

岩崎 与えられるだけでなく、きちんと自分で考えることが大切。そういうところが、最後には個の力として伸びていくように感じました。



東日本大震災を機に 沸き上がった新しい使命感

野中 岩崎さんは競泳だけでなく、今は着衣泳も熱心に指導されていますよね。どういった想いで始められたことなんですか？

岩崎 着衣泳との出会いは、大学卒業後に出演したテレビ番組でした。そこで初めて着衣泳を経験させてもらい、自分の身を守ることを考えるのはすごく大事だと思いました。それで、着衣泳を普及させたいと思っていただけですが、周囲の方がわたしに求めるのは競技としての水泳なんです。だから10年間くらい着衣泳を指導できずにいました。

それが今こうして、普及のお手伝いをさせてもらっている大きなきっかけになったのが東日本大震災です。あの時、津波によって多くの命が奪われましたが、それは服を着たまま波にさらわれてパニックになったのも原因のひとつでした。今、学校によっては自分の身を守る知識を持ってほしいということと着衣泳を指導しています。

野中 わたしの時代にはなかったことですが、今は自分の身を守ることに熱心な学校も多いんですね。

岩崎 親が知識を持っていることも大事で、わたしは娘が川に入る時はビーチサンダルではなくスニーカーを履か

せています。スニーカーだと足を守れるし、空気が入っているので足が浮くんです。クーラーボックスも浮き輪代わりになりますし、ビニール袋も空気を入れれば呼吸を確保できたりもします。

服を着たまま水に落ちればどうしてもパニックを起こすものです。だけど、一度でも着衣泳を経験していれば、どういった感覚だったかを思い出して少し冷静になれると思います。

野中 普通は「服を着ていたら泳げない」と考えてしまい、必死に服を脱ぐうとしてしまいますよね。

岩崎 そうですね。でもそういう時は

脱がないほうがいいんです。服を着ていたほうが体温の低下を防げるし、無理に脱ごうとしても体力ばかり消耗してしまいます。もしビニール素材の服を着ていけば空気が入って浮くようになりすし、とにかく焦って脱がないことです。

服を着たままプールに入れる機会はなかなか少ないかもしれませんが、多くの人にそういう体験をしてもらい、自然の力にはかなわないことも考えながら、レジャーを楽しんでもらいたいと思います。「競技経験者のわたしでも、自然に敵意を向けられれば身を守ることは難しい」ということを伝えるのも、わたしの役割のひとつのような気がしています。



アメリカ留学を経て、指導者としてステップアップした今では、水泳の魅力や着衣泳などを教えている

モチベーションの源と感謝の気持ち

野中 働くうえで、「何のために」働くのかといえ、もちろんお給料も大切ですが、わたしが一番重要視したいのは、「ありがとう」と言ってもらえる仕事をする事なんです。それがあから、自分のモチベーションが高まります。先ほどの鈴木ヘッドコーチとのエピソードにも通じますが、働いて、自分が認められるということほど、ありがたいことってないと思うんです。そういう意味では、働くということの基にある働きがいはいかに高めるかがすごく重要。その結果が業績にもつながると思うんです。スポーツの世界はどうですか。

岩崎 自分の存在価値みたいなことですよ。スポーツでも認められたいという欲求はあると思います。やり方は人それぞれかもしれないですが、それはすごく大事だと思います。

野中 アトラクタオリンピックの女子マラソンで銅メダルをとった有森裕子さんは「自分で自分を褒めたい」と言っていました。同じような気持ちだったんでしょうね。

岩崎 自分を褒めるって大事だなんて思います。

野中 実は、モチベーションのことを2年間研究したことがあります。その頃講演をした時に必ずみんなに聞くんです。「みなさんが働きがいを感じる時はどんな時ですか」と。すると、毎回、約半分の人が「褒められた時」と答えるんです。

つまり、「ありがとう」という言葉が相手のモチベーションを上げていることに気づきました。ただ、それはテクニクで言うんじゃないで、相手を認め感謝の気持ちを心からの「ありがとう」と言いあえるそういう組織風土、文化を根付かせたいというのが、わたしの願いです。

岩崎 そうですね。わたしはそのことをアメリカで学びました。アメリカ人はすぐ褒めてくれるんです。知らない人でも、かわいいお洋服を見れば「それ、かわいいね。どこの？」と、普通に会話するんです。かわいいものはかわいい、きれいなものはきれいい、いいものはいいと言うのはすごく大事だなと思います。

わたしは今、子育てをしながらお仕事をしていますが、ひとりですべて抱え込むのは難しく、家族にフォローしてもらうこともあります。ただ、家族に支えられていると実感しているもの、家族だからこそちよつとイラッとすることもあるんです(笑)。でも、これだけ支えてくれている家族に対して、やっぱり感謝の気持ちを口に出さないといけないという思いがあります。



メールでもちゃんと「ありがとう」と伝えることを意識しています。言わないと伝わらないことってありますよね。

「今が一番幸せ」と思う瞬間は日々変化する

野中 さて、2020年、いよいよオリンピックが56年ぶりに日本に戻ってきます。どういう夢や期待を持たれていますか？

岩崎 オリンピックに出た者として、その魅力を十分感じています。よく、子どものためとか、次の未来のためとか表現されていますが、もちろんそれは本当にそうなんですけど、それだけではなくて、大人が本気になっていて姿を子どもに見せることも大事だと思っています。

あるオリンピック会場で、わたしの横に観戦を楽しんでいる家族がいたんですが、子どもの前で親がグワーッと興奮しているんです。子どもはそれを見てポカーンとしながらも、一緒になつて拍手をしていました。そういうことが大事なんじゃないかなと思つて。大人の真剣な姿を見れば、その情熱は絶対に子どもにも伝わるものです。だからわたしは、自分もちゃんと楽しむ意識を持って参加していきたいと思つています。

野中 「東京オリンピック」と言われていますが、わたしは「日本のオリンピック」という感覚で臨みたいと思つています。開催は東日本大震災からほぼ10年、日本が被災地も含めてこれだけ復興したよというのを世界のみならず、の方に知っていただきたい。あるいは、

電機業界からすると、安全面、環境面の問題に対しての日本のアプローチ、新しい社会像みたいなことも世界中に発信していきたいと思っています。スポーツでもテクノロジーでも、夢のあるオリンピックにしたいですね。

岩崎 また、オリンピックとパラリンピックの結びつき、一体感が日本には欠けているので、その意識も変えていきたいですね。

野中 世界からリスペクトされる大会にならないといけませんね。

では最後に、岩崎さんと言えば「今まで生きてきたなかで、一番幸せ」という言葉があまりにも有名ですが、今の岩崎さんにとっての「幸せ」な瞬間はどんな時ですか？

岩崎 14歳のわたしにとって、あの瞬間は、たしかに生きてきたなかで一番の幸せでした。だけど、幸せの尺度や角度は日々変化するものですよね。今は、子どもの成長を見守るのが一番の「幸せ」です。

野中 本日は、センセーショナルな金メダル獲得の背景から、課題意識やモチベーションについてなど、競技者の枠を超えて幅広いお話ができました。本当にありがとうございました。

